

## 長者ヶ原廃寺跡(岩手県奥州市)

ここが長者ヶ原廃寺跡/平安時代後期の寺院跡/奥州藤原氏の祖先にあたる、俘囚(ふしゅう)と呼ばれたエミン(蝦夷)の末裔である安倍氏が建立したらしい  
([クリックしてビデオを見る](#))



説明板/安倍氏は陸奥国でエミシの血を引く豪族であったが、前九年の役で滅亡した/その一族の娘が奥州藤原氏の祖である藤原清衡の母であった



## 長者ヶ原廃寺跡

ちょうじゃがはらはいじあと

Chôjagahara Haiji Ato  
(Remains of defunct temple)

長者ヶ原廃寺跡は、平安時代後期、今から約1000年前に建てられた寺院の跡です。一辺約100mの築地塀跡が方形に巡っていて、その中に3棟の礎石建物跡が確認されています。築地内部の中央よりやや北側に位置しているのが桁行・梁間ともに5間の本堂跡で、その西側に3間四方の西建物跡があり、いずれも基壇が良好な状態で残されています。南辺築地のほぼ中央には桁行3間・梁間2間の南門跡があります。造営された年代、整然とした伽藍配置と築地を有することから、この寺院を建立したのは奥州藤原氏の祖先である安倍氏ではないかと考えられます。長者ヶ原廃寺跡は、藤原清衡が中尊寺を建立する前から衣川の地に仏教文化が華開いていたことを伝えるとともに、平泉文化の成り立ちを窺う上で貴重な遺跡です。

Chôjagahara Haiji Ato is the site of a temple built about 1000 years ago (towards the end of the Heian era). Traces of roofed earthen walls about 100 metres long, enclose a square where foundation stones of three buildings have been found. The site of the five-bay sized Hondô Ato (main hall) is situated slightly to the north of the centre. The Nishi Tatemono Ato (West Building Remains) can be seen to the west of the Hondô. It is thought to have been three bays square. The foundations of both the Hondô and the Nishi Tatemono have been preserved in good condition. There are remains of a south gate measuring three bays by two almost in the centre of the southern wall. The temple is thought to have been commissioned by the Abe family, the ancestors of the Ôshû Fujiwara family. Evidence for this is found in the age of the temple, the precise arrangement of the temple complex, and the roofed earthen walls. The Chôjagahara Haiji Ato site shows that Buddhist culture flourished in Koromogawa before the first Fujiwara lord Kiyohira built Chûsonji. It is an important source of information for the early development of Hiraizumi's culture.





長者原廃寺跡  
この石碑は、長者原廃寺跡を示すものである。この寺は、平安朝中期に創建されたとされ、現在は廃寺である。寺跡には、石造の礎石や瓦の破片などが散見される。また、寺の周囲には、古くからの参道や石垣の残骸も確認されている。この寺は、当地の歴史を伝える重要な遺跡である。

史跡  
長者原廃寺跡

藤原清衡は人生色々あって、父を死に追いやった清原氏に育てられることとなったが、後三年の役でその清原氏を滅亡させ、奥州藤原氏三代の礎を築く

ちようじゃがはらいじあと

## 長者原廃寺跡

この遺跡は、南を正面とするほぼ方形（南北一〇〇M強、東西九〇M弱）の土塁で区画されており、昭和三三年と四七年の二回にわたる発掘調査によって西門土塁跡、南門跡、本堂跡、西方塔跡が確認された。ここは承安四年（一一七四）に一六才の源義経を京から連れてきたという秀衡の御用商人三条吉次季春、通称金売吉次の屋敷跡と伝えられてきたが、礎石の配列や遺物の配置及び出土した土師器等から平泉藤原氏の時代かそれ以前の重要な寺院跡と推定されている。

（岩手県指定史跡 昭和三二年七月一九日指定）



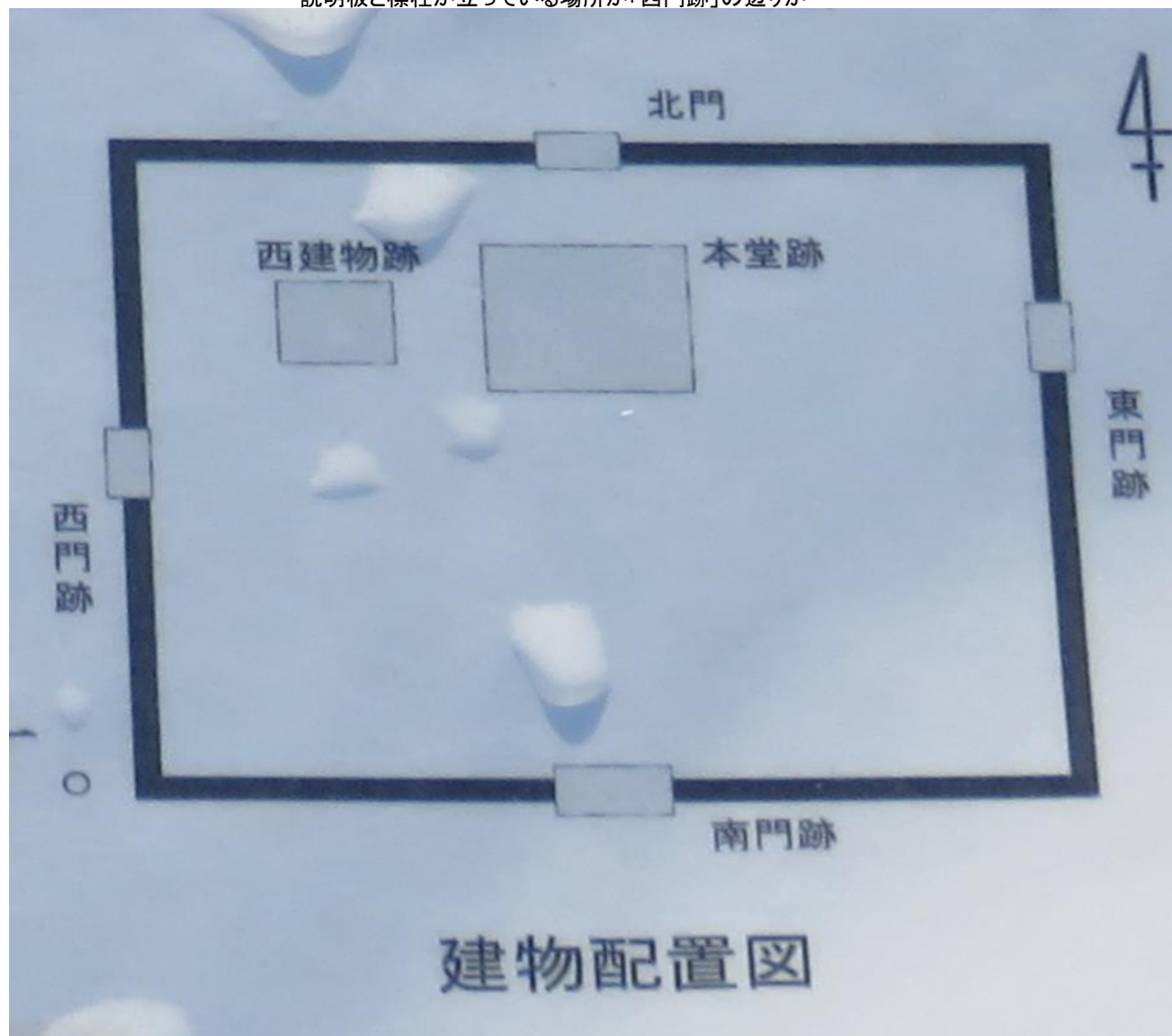
本堂跡(手前)と南門跡(奥)の中軸線を、北側から南方向に見たところ/右手に説明板と標柱が立っている

長者ヶ原廃寺跡  
解説 其の七

## 山を意識した建物配置



説明板と標柱が立っている場所が「西門跡」の辺りか…





説明板の背後を見ると、築地の跡が残っている

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





その説明板があった





### 長者ヶ原廃寺跡と築地



検出された築地塼跡。地表から15cmほど掘り下げると現れてきます。高さはこの部分で約50cm程です。古寺院を除き、遺跡でここまで保存状態のよい築地塼跡は全国的に見ても他にあまり例がありません。

築地塼跡を断ち割ったときの様子。しま模様部分が築地塼です。これにより長者ヶ原廃寺跡の土手状の高まりが築地塼であることが確定されました。なぜ、しま模様に見えるかは「解説その四」をご覧ください。

法隆寺・西院の築地塼（室町時代のもの、重要文化財）。長者ヶ原廃寺跡からは瓦が発見されていないので、瓦葺でなかった可能性が高いのですが、このような土でできた塼が巡っていたこととなります。



あの時代  
あついで  
なつて  
こゝ

長者ヶ原廃寺跡を掘り進んでいるところ

ある地域を区画する工作物を「垣」といい、宮殿や役所、貴族の邸宅、寺院は土で作られた築垣（=築地）で囲われています。この例示から分かるように、どんな建物でも築地で囲うことができたわけではありません。たとえば、長者ヶ原廃寺跡と同時期の様子を記した記録には、「六位以下の、築垣ならびに檜皮葺の宅は停止すべし」（『日本紀略』）とあり、貴族（五位以上）でなければ屋敷の周りを築地で囲うことは許されていなかったようです。また寺であっても村の草堂のような場合、築地で囲われることはなかったようです。このことから、建物を築地で囲うということは、建物の主またはそれを造営する者がある程度の地位にあったことを示しているといえます。

つまり、長者ヶ原廃寺跡で築地が発見されたということは、寺あるいは寺を造営した人物の地位が高かったこととなります。

「解説その二」で長者ヶ原廃寺跡に築地が発見されたことにより、このお寺が安倍氏によって建立されたと推測したのは、そうしたことも根拠のひとつになっているのです。



現在地

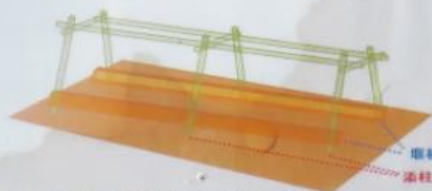


その先の、築地跡の曲がり角にも説明板が立っている





### 築地の造り方



第1図 築地を造るための型枠



第2図 築地を造る手順



写真1 築地を造っている様子  
長岡市埋蔵文化財調査センター



写真2 志波城跡(盛岡市)で復元された築地

築地は、まず型枠を作り(第1図)、その中に土を入れて突き固めて壁体をつくり(写真1)。その際、土は一気に入れるのではなく、何回かに分けて作業をします(第2図)。また、長さ100mの築地を造る場合、長さ100mの型枠を用意することはありません。型枠の長さは、どれくらいの長さの堰板(土留めのための横板のこと)を用意することができるかによります。10mだったら、10回に分けて、5mだったら20回に分けて100mの築地を作ることになります。

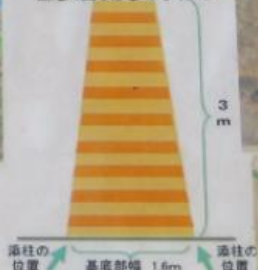
このように何回かに分けられて作られるので、横から見ると、下から上にまんべんなく5~10cmほどの横方向の細かい筋と、数mおきに縦方向の切れ目が、それぞれ見えます(写真2)。



発掘された築地跡

上の写真は築地跡の発掘状況を、ほぼこの解説板の位置から撮影したものです。写真では見にくいかもしれませんが、横方向のしま模様を確認されます。また、点線の場所が縦方向の切れ目部分です。この間の距離は3mとなります。縦方向の切れ目の外側には、添柱が見つっています。築地を挟んだ添柱同士の距離は1.6mとなります。

築地の高さなどのくらい?



添柱の位置 基礎部幅 1.6m 添柱の位置

築地の高さは基礎部の幅に比例します。長者ヶ原寺跡の場合、1.6mなので高さは3m前後と推測されます。



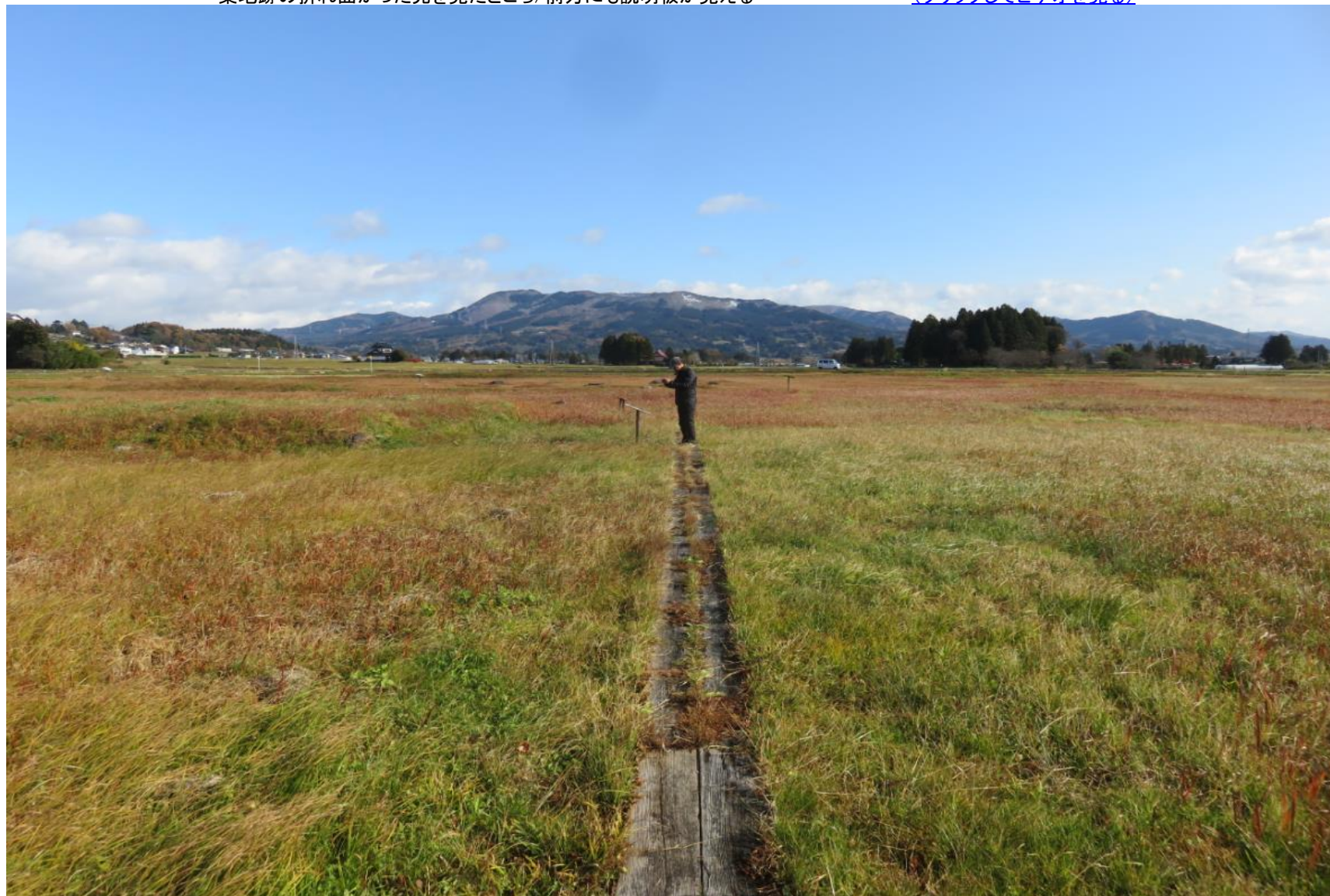
小さな写真でこそ、  
「あんなに小さい  
下地は、明かに  
いっぺんで見えて  
見ると、

添柱の跡

現在地

築地跡の折れ曲がった先を見たところ/前方にも説明板が見える

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





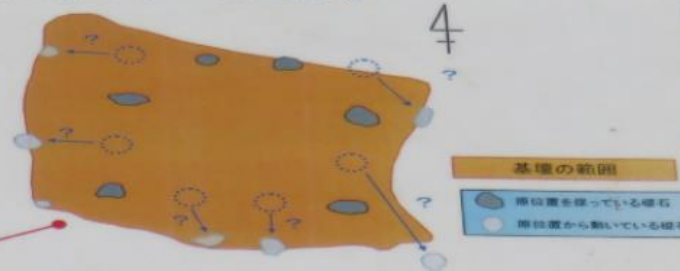
「西建物跡」の説明板

長者ヶ原廃寺跡  
解説 其の五

まだまだ不明な点が多い西建物跡



南東から見た西建物跡



現在地

基礎の範囲

- 原位置を控えている礎石
- 原位置から動いている礎石

西建物跡は発掘調査の結果、原位置から移動している礎石が7つあることが分かっています。もともとの位置は確認されていませんが、ほぼ図の○の場所だろうと推測されています。移動した礎石の位置が、○の位置ならば、この建物は桁行・梁間がそれぞれ3間だったことになります。礎石の原位置が未確定で柱と柱の間の距離も確実にないため、この建物跡がどのような構造のもだったのかは、今のところ不明です（そのため名称も西建物跡としています）。しかし、本堂の隣に位置していることと推測される建物の大きさから、今のところ塔である可能性が高いと考えています。

様々な種類の塔



京都・醍醐寺五重塔



茨城・小山寺三重塔



和歌山・根来寺多宝塔

インドでは仏教の教祖ガウタマ・シッタールタの遺骨である舎利などを納めたストゥーパが建てられ、仏教徒の信仰の対象となりました。例えばアショカ王は8万4千の塔を建てたと伝えられています。その形は、右の写真のように円形の基壇の上に半球状のドームを乗せたものですが、仏教が中国に伝わると、ストゥーパは中国在来の木造樓閣(ろうかく)建築と融合し、独特の形となりました。日本の仏塔もこの影響を強く受けていて、現存する大規模仏塔はすべて木造で、層塔・多宝塔(たほうた)がほとんどです。当初は、金堂とともに伽藍(がらん)の中心に位置していましたが、時代が降るにつれてその地位は低下して象徴的な存在となり、中心から離れた場所に建てられるようになります。



世界遺産に登録されている  
サントリーのストゥーパ



現在地

この辺りが「西建物跡」のようだ/表示板がある





アップで見たところ



さて、その隣にも説明板が立っていた/前方に「本堂」の礎石が残っている/南西側から見たところ

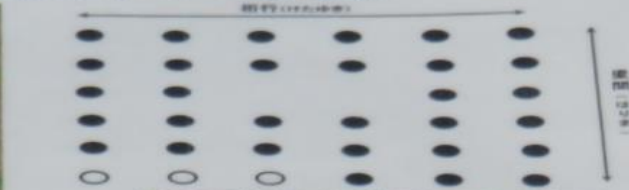




## 日本最古の中世仏堂跡か？～本堂跡



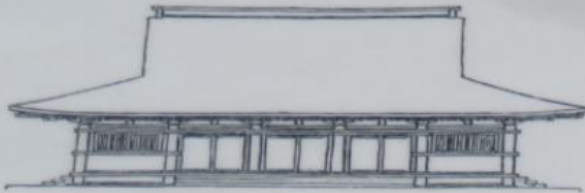
本堂跡を真上から見た写真。礎石が規則的に並んでいるのが分かります。



礎石の配置図(●は目に見えるもの)

柱に平行して柱に掛けられた材を桁、垂直して掛けられた材を礎といます。近代以前の日本建築の平面構造は、この桁と礎の方向に柱の礎がいくつあるかで表します。この本堂の場合、正面から見て柱が6本立てられているので、桁行6間(この場合の間は、長さではなく柱と柱の間のことと指します)と表現します。また、側面からみても同じなので、礎間5間とします。

礎石とは、柱を据えるための土台石のことです。屋根に瓦を葺くと重くなり、そのため、地面に穴を掘り、そこに柱を立てるだけの掘立柱建物では屋根の重さで柱が沈んで建物がゆがんでしまいます。そこで屋根に瓦を葺く時は、築地塀と同じように版築工法で基礎を造って石を据え、その上に柱を立てるのです。こうした建物を礎石建物といます。屋根に瓦を葺くことができるのは、役所か寺院に限られています。この遺跡を寺院跡と推測しているのはそうした理由からなのです。



正面



側面

仏堂とは金堂(にんどう)とも呼ばれ、仏像を安置するための空間で、現在のように誰でも気軽に入れたわけではありませんでした。また、仏教の儀式のことを法会(ほっかい)といますが、今から1100年前頃までは金堂と金堂の前面の空間(これを前庭(まへにわ)といいます)などを利用して行われていました。時代が移り信仰のあり方が変化するにつれて、法会も変わっていきます。すなわち、俗人も法会に参加するようになり、さらに伽藍(がらん)全体を使って行われていきました。金堂(仏堂)だけで完結するようになり、建物もこれに対応するようになっていきました。具体的には、本堂の前面に礼拝するための空間を広げるようになっていきました。この礼拝の空間を礼堂(らいどう)といますが、この部分は最終的には本尊を安置する空間である内陣と同じぐらいの広さになります。このように本尊を安置する内陣とこれを礼拝するための礼堂とからなる仏堂を中世仏堂といます。

現存する最古の中世仏堂は、永暦2年(1161)に建て替えられた、奈良県葛城市の当麻寺曼荼羅堂(国宝)なので、この本堂跡に建てられていた建物が中世仏堂だとすると、それを100年以上さかのぼることになります。新たな建物の出現は新しい時代の信仰のあり方を反映したものと見えるので、本堂跡がどのような建物だったのかということは、日本の仏教史を考える上で、非常に重要なことなのです。

図2本堂の復元図  
2009年2月開催の長者ヶ原麻寺跡発掘調査報告書(資料)においてこれまでの調査成果に基づいて、清島正士氏(国立歴史民俗博物館名誉教授)に本堂の柱の礎を復元していただきました。モデルは滋賀県甲良町の西明寺・本堂(国宝)です。現在は桁行7間・礎間7間ですが、鎌倉時代初期の創建当初は4間四方だったことが分かっており、柱の配置も長者ヶ原麻寺跡とよく似ています。



写真2 西明寺(さいめいじ)本堂



現在地

こな塩梅





北側から南方向に見たところ/手前に説明板がある



### 山を意識した建物配置



南門跡・本堂跡・北門跡は南北に並んで建てられていて、それぞれの建物の中心軸はほぼそろえられています。そして、この軸線（上の写真の……線）を南に延長すると、現在中尊寺が鎮座する関山丘陵で最も標高が高い地点に到達します。

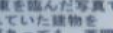
また、右の図のように、東門と西門は対称の位置に建てられていません。東門跡が西建物跡の真東にあるのに対し、西門跡は本堂跡の真西から南寄りに建てられています。これは本来、東門と対称の位置に建てべきだったものを、東稲山を正面に見ながら西門から築地の内側に入れるように工夫したためだったと推測されます。



建物配置図

このように長者ヶ原廃寺跡は周辺の山々を意識して設計・造営されていたと考えられるのです。



左の写真は西門から東を臨んだ写真です。西建物跡と本堂跡に建てられていた建物を  で表しました。2つの建物があっても、西門からは東稲山の姿が正面に美しく見ることが出来ます。ちなみに東門と対称の位置にあった場合、上の写真のように西建物と本堂の陰になって見えません。



現在地



こんな塩梅

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



北西側から見たところ





ここにも説明板が立っている



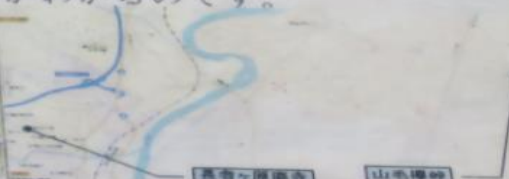
## 源頼朝も目にしたかった礎石群



文治5年(1189)9月27日、奥州藤原氏を滅ぼした源頼朝は鎌倉に帰る前、わざわざ時間を割いて衣川の安倍氏ゆかりの地を見学しています。その時の様子が、『吾妻鏡』に記録されていて、「土塚の中には何も残っていない。秋草が生い茂っているばかりで、どこに礎石があるのかも分からない」とあります。この礎石は長者ヶ原廃寺跡のものと考えられることから、今からちょうど820年前、源頼朝はこの礎石群を探し求めていたことがわかるのです。



山毛榎峠で見られる礎石と似た岩。斜面にたくさん転がっています(1)



### 礎石の産地～山毛榎峠

岩手県立博物館の調査により、礎石は角閃石安山岩であることが確認されています。これは北上山地で産出するものです。東稲山の北麓の山毛榎峠周辺では今でも斜面のあちこちでみられ、中には高さが人の背丈ほどのある大きな岩も見られます。途中には東北第一の大河北上川があるので、ここまでどのように運んできたのか明らかにすることも課題のひとつです。





さて、ここは「北門跡」

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



### その先には何がある？北門跡



北門跡を北東から見た写真。築地塀が途切れているのが分かる。



真上から見た写真。壁が途切れている部分は築地塀も途切れている。

1958年の第1次調査で北築地跡の外側にある北堀跡が途中で途切れていることから、北門があったのではないかと推測されていました。それから50年後の2008年、第11次調査で築地塀が途切れていることを確認しました(上の写真)。門のものと思われる柱跡が2つしか見つかっていないことから、今のところ右の図のような簡易な棟門(おねもん・おななど)だったのではないかと考えています。



これで築地塀の各辺に門があったことが確定しました。次に問題となるのが、築地塀の外側がどのような状況だったのかということです。すなわち、この寺の僧が、どこに住み(僧房(そうぼう)の場所)、どこで食事をしていたのか(食堂(じきどう)の場所)、経典はどこに保管されていたのか(経蔵(きょうぞう)の場所)などです。今後は、こうした施設があったのか否かを探っていくことになります。

### 長者ヶ原廃寺跡にあったかもしれない建物

お寺の敷地のことを伽藍といい、そこには金堂・塔・講堂・鐘楼・経蔵・僧房・食堂の7つの建物が主なものであったので、これを七堂伽藍といいます(ただし、宗派や時代によって門や浴室などが入ることもあります)。長者ヶ原廃寺跡に僧もしくは尼がいたとすれば、その住まいや食事の場が必要になります。そうした建物をここでは法隆寺を例に紹介します。



法隆寺 東堂(とうどう)



法隆寺 食堂(じきどう)



法隆寺 経蔵(きょうぞう)

東堂は7世紀末に建てられたと考えられている僧房です。扉と窓を1間ずつ交互に配しており、2間分が1つの房(すまい)となっています。実用的な建物なので、柱の上ですぐ桁を載せるなど簡素な作りとなっているのが特徴です。現在の姿は法隆寺再建時のものではなく、1365年に改造された当時の姿を復原したものです。ただし、柱や礎石は一部は創建時の古材が再利用されていると考えられていて、当時の姿(の一部)を伝えています。

食堂は、もとは政所(まんどころ)といって寺の事務所だったものを平安時代に食堂に転用したものです。僧は土間に敷かれた畳の床(しょうじ、畳敷のこと)に座り、作法に従って食事をしていました。経蔵は経典を納めるための建物です。二階建てが基本だったようで、平安時代になると1階部分を裾広りの礎で覆う形式が生まれています。

皆さんは長者ヶ原廃寺跡には本堂・西建物跡・4つの門以外にどのような建物があったと思いますか？



現在地



こちらは「南門跡」の付近と思われる/発掘調査中のようだ/西側から見たところ





表示板があった

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)







南門跡

South gate



東側から見たところ





(クリックしてビデオを見る)

三善寺 南門跡  
解説 其の十

### 珍しい構造の南門跡



礎石の位置 現在位置



南門跡の発掘状況（真上から） 志波城跡（徳島市）で復元された八脚門



志波城・八脚門の内部



本柱 唐居敷 能恵法師絵巻の一場面をなぞったもの

現在、南門跡は農道の下に隠れています。左上の写真は、平成18年度の発掘調査の際に撮影したものです。○の部分に礎石があり、桁行3間・梁間2間の建物だったことが確認できました。この場合、お寺や役所の正門によく見られる八脚門となるのが一般的ですが、南門跡では柱を据え付けるための本柱や扉の下側の軸穴を受けるための唐居敷を据え付けた痕跡がア・イの部分で検出できなかつたため、八脚門とはなりません。

南門跡と同じような柱配置の建物は、他の遺跡でいくつか見つかっていますが、具体的な姿を復元したものはないようです。絵巻などの絵画資料でも類例は少なく、鎌倉時代に描かれた能恵法師絵巻に見られる程度です（右下の図）。南門がどのような姿をしていたのかは、どのような機能を果たしていたのかということとあわせて（単なる門だったのならば、八脚門でもよかったですはずです）、今後の研究課題です。

※桁行3間で中央の間を扉口とする門。扉の前後に柱が4本ずつ、計8本立つ。八脚門の名はこれに由来しています。



現在地

さて、長者ヶ原廃寺跡の近くに「並木屋敷伝衣川柵」という案内表示があった





このエリアが安倍氏の拠点の一つであった衣川柵跡のようだ/この左手の方に説明板が立っていたようだが・・・  
([クリックしてビデオを見る](#))



さて、ここは盛岡市遺跡の学び館/常設展示の様子

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)

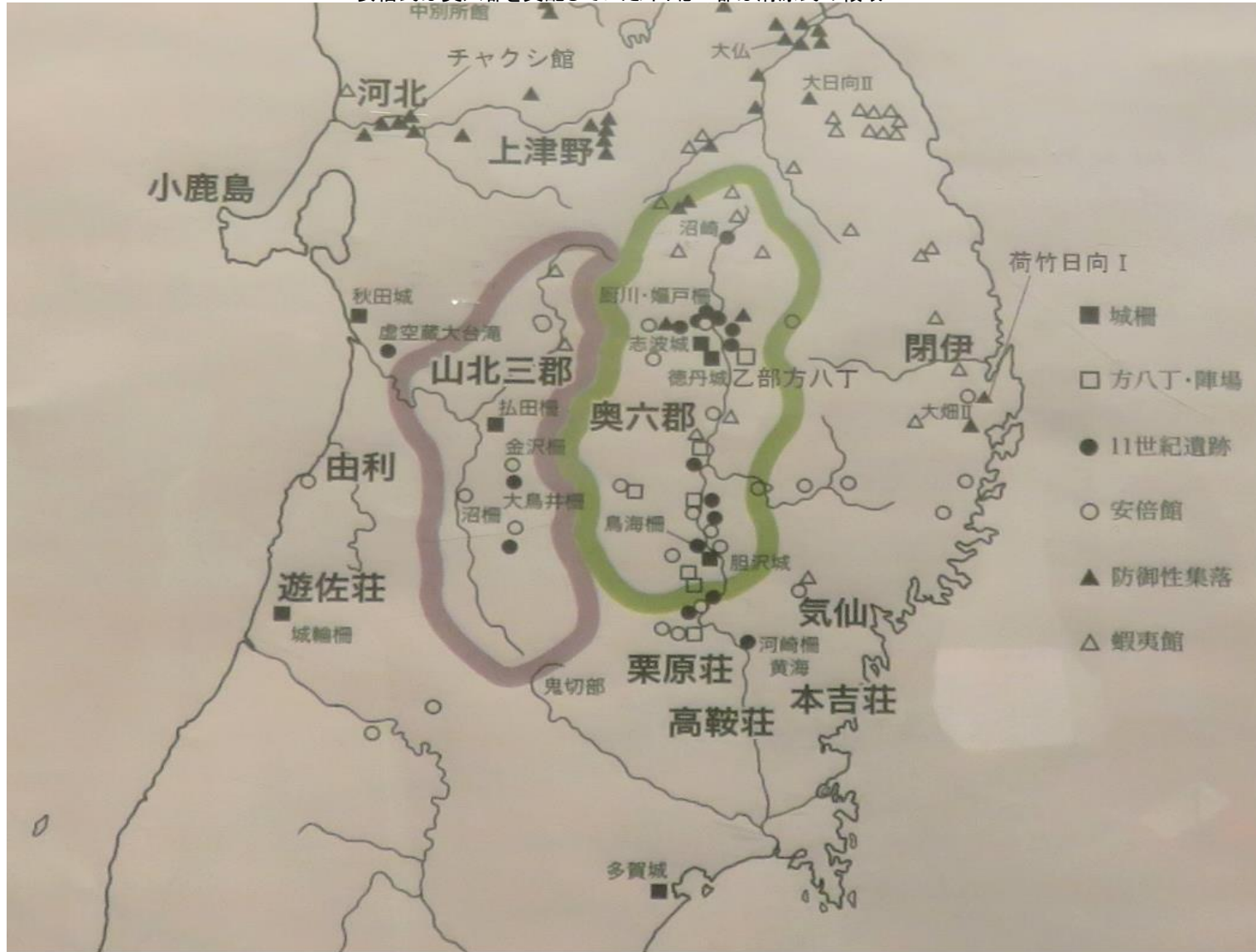




企画展「安倍氏最期の拠点 厨川」が開催中/「俘囚(ふしゅう/陸奥・出羽のエミシ(蝦夷)のうち、大和政権の支配に属するようになったもの)」と呼ばれたエミシの末裔である安倍氏についての展示/前九年の役で、ここ厨川(厨川柵)で滅亡したらしい [\(クリックしてビデオを見る\)](#)



安倍氏は奥六郡を支配していた/山北三郡は清原氏の領域





厨川柵のエリア



厨川の地形と遺跡





厨川柵のエリアの位置を示す



## 参考ホームページ

<https://www.city.oshu.iwate.jp/site/kanko/5791.html>

<https://www.city.oshu.iwate.jp/uploaded/attachment/15817.pdf>

<http://www.hb.pei.jp/shiro/mutsu/koromogawa-saku/>

<https://sirotabi.com/8455/>

[http://tamaki39.blogspot.com/2018/06/blog-post\\_69.html](http://tamaki39.blogspot.com/2018/06/blog-post_69.html)

<https://sites.google.com/a/onodenkan.net/lie-dao-cheng-zhi-ji-xing/van-shou-xianno-cheng-ji/yi-chuan-shan>

<https://blog.goo.ne.jp/pea2005/e/fd41f8632066739fd06202f7ff102d36>

[https://muragon.net/blog1/2015/09/15\\_2249.html](https://muragon.net/blog1/2015/09/15_2249.html)

[https://blog.goo.ne.jp/tosizo\\_1975/e/c399c0f6284711e4f63d163ed410ec07](https://blog.goo.ne.jp/tosizo_1975/e/c399c0f6284711e4f63d163ed410ec07)

<https://www.cafe-dragon.net/trip/castle/tenshoii.html>

<https://murakumo1868.web.fc2.com/02-ohsvu/01-001.html>



